ReaD&Researchmapシンポジウム2013

日 程 2013年12月2日(月)

場 所 一橋大学一橋講堂

主 催 科学技術振興機構

後 援 国立情報学研究所

情報管理 56(11), 801-803, doi: 10.1241/johokanri.56.801 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.56.801>)

はじめに

ReaD&Researchmapは科学技術振興機構（JST）が提供するサービスで、日本で研究活動を行っている研究者および海外で研究活動を行っている日本人研究者の業績情報を収集・提供している。JSTのReaDと国立情報学研究所（NII）のResearchmapを統合し、2011年11月にReaD&Researchmapとしてサービスを開始した。

今回、「ID化と情報循環」をテーマにReaD&Researchmapを中心とした研究者情報に関するシンポジウムを開催し、230名の参加者を得た。冒頭のJST執行役加藤治彦の挨拶（図1）の中で、2014年4月からサービス名称がResearchmapとなることが発表された。また、文部科学省研究振興局の下間康行参事官（情報担当）からReaD&Researchmapへの期待を込めた挨拶があった。シンポジウム期間中、ロビーでは展示も行われた。

発表内容

まず、文部科学省大臣官房政策課 斉藤卓也評価室長から「ReaD&Researchmapと合理的な科学技術政策形成」というタイトルで発表があった。この中では、「政策のための科学」の目標と、「政策の科学」に関連する米国の動向、また科学技術改革タスクフォース戦略室の今後の予定と、現在ある資源の有効活用と、そのためにReaD&Researchmapによる研究者の膨大なデータや研究者のネットワーキング、情報公

図1 JST執行役加藤治彦の挨拶

開機能、申請手続きの簡素化などICT技術による科学技術活動の最適化の重要性が高まっていること、そしてReaD&Researchmapへの期待が述べられた。

その後、京都大学、NII、立教大学から研究者情報の整備・活用等に関する発表が行われた。

京都大学情報環境機構 IT企画室 ITアーキテクトの古村隆明氏からは「ReaD&Researchmapと京都大学教育研究活動DBの連携および代理入力機能の追加」と題して、ReaD&Researchmapを積極的に活用し、同大学が運用しているデータベースと連携するために計画している「Shibboleth認証でのシームレスな連携」および「代理入力機能の実現」についての発表があった。代理入力機能は、研究者本人しか行うことができなかったShibbolethによるID連携を研究者自身が行うのではなく、権限委譲を受けた代

理人が行えるようにすることで研究者の負担を減らすことを目的としている。また、代理人が、大学が運用しているデータベースに業績情報の登録ができるようにするものであり、これには学認mAPというShibbolethで利用できるグループ、メンバー管理の仕組みを使用する予定とのことであった。

NII学術認証推進室の山地一禎准教授からは「ReaD&Researchmapの学術コンテンツをリッチにワイドにする仕組み」と題して、学術コンテンツの保存と公開という観点から、ReaD&Researchmapに登録されている論文情報、講演資料などのコンテンツとNIIが提供するOpenDepoリポジトリとの連携について発表があった。この連携により、ReaD&Researchmapに登録されているコンテンツを効率的に検索できるようになるなど、ReaD&Researchmapと機関リポジトリとの連携による学術コンテンツ活用の可能性が述べられた。

立教大学メディアセンター根岸千佳氏からは、「立教大学における研究者情報～利用・運用イメージと今後の展開～」と題して、同大学で使用している研究者情報データベースについての発表があった。同大学の研究者データベースの導入・運用の経緯、システムの概要について述べられた。データベースに登録されたデータは、一括してReaD&Researchmapに登録されるほか、大学基準協会への申請資料（作成）のためのデータとしても使用されている。研究者情報の充実と情報の鮮度維持、登録された情報の有効活用が今後の課題とのことであった。

発表の最後にJSTからReaD&Researchmapの運用報告と今後の計画と取り組みについて説明を行った。研究者情報の登録は23万人を超え、今後、社会貢献項目の追加、業績情報から全文情報へのリンクの追加、研究者の求人・求職サイトであるJREC-INとの連携などが予定されている。

パネルディスカッション

モデレータにReaD&Researchmapの開発者である

NII社会共有知研究センターの新井紀子センター長、パネラーに北海道大学大学院情報科学研究科システム情報科学専攻システム環境情報学研究室の小野里雅彦教授、吉備国際大学の下山進副学長、国立高等専門学校機構地域イノベーション推進本部産学連携・知的財産推進室の高橋薫室長、JST知識基盤情報部部長の水野充を迎え、「ReaD&Researchmapを活用しつくすー研究者情報収集の最適解は？ー」というタイトルでパネルディスカッションが行われた（図2）。

ディスカッションに先立ち、各パネラーから自機関の状況について発表があった。

北海道大学では2013年4月に研究者総覧のWebサービスをリニューアルし、このデータソースとしてReaD&Researchmapを使用している。具体的には、ReaD&Researchmapに登録された研究者情報をWebAPIで大学のデータベースに取り込み、足りないデータ項目は大学が独自に持っているデータを使用している。大学が独自に研究者情報の入力画面を持たずにReaD&Researchmapを活用することで、研究者は研究業績データの収集・管理・入力にかかる労力が削減できるようになり、大学としてはシステムの導入・運用にかかる経費が大幅に削減できたとのことであった。

吉備国際大学は独自の研究者データベースを持っていないが、学校教育法施行規則等の改正によ

図2 パネルディスカッションの様子

り、(教員の)教育情報の公表が義務付けられたことから、それまで毎年作成しPDF化してWebページで公開していた「教育研究業績書」の作成をやめ、ReaD&Researchmapへの登録を義務化し、WebページからReaD&Researchmapの各研究者のページへリンクをするという方法で教育情報の公開を行っている。

国立高等専門学校機構では、全国にある51の高専の各教員がReaD&Researchmapにデータを登録し、そのデータをWebAPIにより取り込んでいる。さらに各高専から研究・技術シーズ情報も取り込み、これらの情報を組み合わせて国立高専研究情報ポータルを作成している。国立高専研究情報ポータルからは研究者の地区単位、学校単位、研究分野単位での検索や、情報のダウンロードが可能となっている。

ReaD&Researchmapの登録方法の紹介がモデレータの新井センター長からあり、引き続いてディスカッションが行われた。

ディスカッションでは、大学で独自のシステムを作りそのデータをReaD&Researchmapに登録するのではなく、ReaD&Researchmapに登録を行いそのデータを使用することを選択したそれぞれの機関の理由、研究者情報の登録・公開のための呼びかけの工夫、

情報の登録・公開のインセンティブをどのように与えるのか、ReaD&Researchmapへの期待などについて、会場からの質問、意見も交えて活発な議論が行われた。

おわりに

さまざまな情報公開が進んでいることから、論文情報、研究課題情報など研究者情報の多くは研究者が入力しなくても集められる時代となっている。機械的に集めたデータの精度を高めるためには、本人による確認が必要である。また、社会貢献等に関する情報の積極的な入力が大学の個性をアピールすることにもつながる。

今回のシンポジウムにより、機関をマネジメントする立場、研究者情報を管理する立場、そして研究者としての立場、それぞれの立場で研究者情報の登録・公開についてのモチベーションが異なるということが明らかになった。鮮度のよい研究者情報を維持するためには、それぞれの立場でどのようにモチベーションを高め、またインセンティブを与えていくのが課題であろう。

((独) 科学技術振興機構 堀内美穂)